

### 3.3 たまねぎ

#### 地域慣行基準

##### 【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	28	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えることとする。

タマネギ栽培は春まきと秋まきに大別できるが、本県では高温期に入る前の6月中旬から7月上旬にかけて収穫する「秋まき栽培」が主体に行われている。

秋まき栽培の場合、11月の定植後から冬期間は地上部の生育はほとんど進まず、根も20~30本程度の太い根が伸びる程度である。そのため、生育に伴う三要素（窒素、リン酸、カリ）の養分吸収は、冬期間はほとんど見られない。その後、**3月になり気温が上昇し始めると、地上部の生育や根群の生育は旺盛になる。生育量の増大と共に三要素の吸収が急激に増加し、収穫期に最大となる**（図1）。収穫時の球の大きさは、肥大開始時の株の大きさによって決まる。また、タマネギの球肥大は必要とする日長と温度条件が揃った時点から開始されるので、肥大開始期までに十分な生育量を確保しておく必要がある。春先の温度上昇が遅く十分な生育量を得にくい地域では、**地温が上昇し根の生育が始まる時に肥効が現れるような施肥が必要である。**

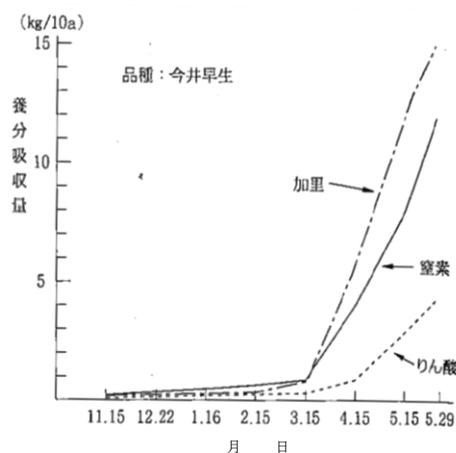


図1 秋播きタマネギの養分吸収状況 (川崎)

三要素各成分の施用効果としては、窒素は生育・収量への影響が大きいため必要な量を施用しなければならないが、**施用量が多過ぎると病害が発生しやすくない、貯蔵中の腐敗が多くなる**ため、過剰施用に注意する必要がある。リン酸は、根群の発達を旺盛にし、生育・球肥大に対する効果が大きい。**カリは**生育・収量への影響は少ないが、**不足すると腐敗しやすい**傾向にある。

本県の秋まき栽培における施肥量は、10a 当たり成分量で窒素 20~30kg、リン酸 25~30kg、カリ 20~25kg を標準とし、地力や品種、貯蔵の有無などの条件により増減する（表1）。施肥配分としては、**基肥で窒素・カリの半量とリン酸の全量を施用し、追肥で窒素・カリの半量を施用する。追肥は、2月中旬頃から2~3回に分けて施用するが、遅くとも4月中旬までに最後の追肥を終わらせる。**追肥時期が遅れると、球肥大開始期までに生育量が確保できず、小球になって収量が減少する。さらに、生育後半まで窒素が効き過ぎると、青立ちして収穫が遅れるほか、軟弱球となって貯蔵中の腐敗が増加したり、萌芽が早まって品質が低下しやすいので注意する必要がある。

表1 たまねぎ 目標収量と養分吸収量

目標収量 (kg/10a)	養分吸収量 (kg/10a)		
	窒素	リン酸	カリ
5,000	20~30	25~30	20~25

なお、基肥の一部に緩効性肥料を用いて追肥作業の一部を省力する方法もある。この場合、基肥として施用する窒素量 (20~30kg/10a) の半分 (10~15kg/10a) を緩効性肥料とし、残りの半分を普通化成肥料として越冬前の肥効を図る。春先には肥効を高めるため、速効性の窒素肥料を10a 当たり成分量で4kg 程度施用する。